



### 堂崎教会広場に植樹 6月28日

島のひかり ホームページアドレス

<http://lifeaidgoto.jp/cx/simanohikari/>



発行

カトリック浦頭教会  
広報委員会  
五島市平蔵町2716  
TEL 0959-00072  
印刷・(株)才津印刷所

## 「島のひかり」二〇〇号 発行記念に寄せて

主任司祭 岩崎 晋吾

島のひかりは昭和四十七年三月に第一号が発刊されています。当時の主任司祭野下神父様のご指導のもと始められた教会報は四十二年を経て二〇〇回目の発行を迎えました。その間、取材、原稿書き、編集、発行に携わってこられた方のご苦労を思うと多大なる偉業としてその功績は讃えられるべきものだと感じています。長年の様々のご苦労と忍耐、また伝える喜びがこのようにして実りをもたらしました。心よりお慶びを申し上げます。

「島のひかり」は教会内外の多くの人に届けられ、文字通り人々の生活と人生を照らす光としての情報を提供して参りました。教会内におきましては教会活動の確認と情報の共有による一致の源であり、島を離れた人々にとっては、故郷の状況を知り、なつかしむ楽しみの便りだった

のではないのでしょうか。

言葉には力があります。以前ある実験をした事がありました。炊いた米を三つの写真フィルムケースに入れてそれぞれに言葉をかける。一つには良い言葉を二つ目には罵るような言葉をかける。三つ目は全く無視して放置しておきます。二週間ほど続けますとこの三つの米に明らかに違いが生まれてきます。良い言葉をかけられた米はきれいなままの状態です。しかし、罵られた米は腐れてしまいました。しかし最も腐敗がひどかったのは放置され無視された米です。人の命も同じように、良い言葉で生かされ悪い言葉で傷つき、言葉もかけられず無視されると大きな苦しみを味わいます。

「島のひかり」がこれからもよいお便り（福音）を伝え続け、多くの人々に喜びをもたらすものとなりますように祈念いたします。

# 祝・島のひかり200号達成



長崎大司教

ヨゼフ 高見 三明

浦頭小教区紙「島のひかり」が本号をもって二〇〇号を数えることになりましたことは、記念すべき喜ばしいことです。聖霊の確かな導きのもと、歴代の主任司祭をはじめ、編集委員、寄稿者、そして読者の方々がたゆまない努力を続けてこられたたまものであります。皆様方に心より敬意を表し、お慶びを申し上げます。まことにおめでとうございます。個人的なことになりますが、一九六九年九月に着任した浦頭小教区初代主任野下千年神父様は、わたしの同郷の先輩です。着任して三年目に小教区紙を創刊されたわけですが、その一九七二（昭和四十七）年三月は、わたしの司祭叙階と重なっております。「島のひかり」がわたしより十九日先輩ですから、これからも後塵を拝することになるでしょう。もう一つ。その年の夏休みに、三ツ山と浦頭の子どもたちの合同黙想会が浦頭教会で行われた折、いただいたサバの唐揚げで体調を崩し、それ以来、サバは遠慮しております。しかし浦頭との縁は厳然とあります。

さて、創刊号の巻頭言の中で、野下神父様は「島のひかり」の意義と役割を説明しておられます。あらためて「あなたがたは世の光である。あなたがた

の光を人々の前に輝かしなさい」というイエス様の言葉を噛みしめたいものであります。

それは、「人に見てもらおう」とするため、つまり、人からほめられて自己満足で終わるためではなく、あくまでもほかの人々が皆さんの立派な行いを見て、天の御父を知り、たたえるようになるためです。

本紙が、これからも皆さんの信仰を養い、証しするため、また離郷者とのきずなを保ち強めるためにその「ひかり」を精一杯輝かし続けていきますよう父である神の愛、主キリストの恵み、聖霊の交わりをお祈りいたします。

## 感謝して



ドミニコ

野下 千年

1969年  
～  
1983年

浦頭教会の皆さま、ご健勝にて復活祭を迎える準備にお励みのことでしよう。

私は昨年三月十九日、司祭叙階五十周年の金祝を迎えることが出来ました。この不足に満ちた私を、ご自分の羊たちの牧者として五十年間もお使い下さった父なる神のお恵みと忍耐深さに感謝するとともに、私の司祭職を支えてくださった皆さまの愛と祈りに心から感謝する次第です。

特に過日、主任司祭をしての十四年間の在任中、大変お世話になりました浦頭教会の皆さまからの心のこもるお祝いのご厚志を、岩崎主任神父さまと信仰代表の方を通してお届け下さいましたことは、ことのほか大きな喜びでした。

この金祝年に、今いちど心を引き締め、主がお与え下さる余生を、主の栄光と人々の救いと地域文化の推進に捧げつくしたいと存じます。

主任司祭を始め浦頭教会信徒の皆さま方のお幸せと小教区共同体の発展のうえに主の豊かな祝福をお祈りいたします。

司祭叙階五十周年を終わるにあたって二〇一四年三月吉日

これから載せる文章は代筆にて掲載させて頂きます。



ドミニコ  
川口善助神父様

1983年  
〜  
1986年

野下神父様の後任として来られた川口善助神父様、少し年を取られていたので、野下神父様とのギャップを感じました。年輩の方々には心地よい信仰生活だったようです。若い時から苦労して来られただけに、何事も節約の心を持っておられました。聖務の合間には外の草取りの姿も見られました。教会行事などで飲み会がありますが、余り好意を持ってなかった様です。ところが転任なさる少し前教会の祭壇を大理石に変え、窓や扉をアルミサッシに変え、それも自費でされ、転任されまし

た。今は天国で浦頭小教区を見守ってくれていると信じています。本当にありがとうございます。 (編集部)



イゲナチオ  
片岡久司神父様

1986年  
〜  
1996年

川口神父様の後任として来られた片岡久司神父様、見るからに穏やかな顔でその容姿の通りとても優しい神父様でした。ある年の復活祭ミサ後に教会役員の方々が発表された。その時、私は39歳、島のひかり編集長に任命されました。その後すぐ神父様をお願いに行き、『これまで島のひかりは年六回発行していましたが、年四回が限度だと思えます。』と申し出た所、『春夏秋冬でいいじゃないですか。』と快く返事を頂き、本当に感謝しました。最近体調を崩されて長崎の病院に入院されています。一日も早い回復を祈ります。(編集部)

### 「島のひかり」 今なお輝け!!

青方教会

マチア

橋口 朝光



1996年  
〜  
2004年

「神は恵を注がれ、地は豊かに実った」

「島のひかり」が一九九五年に創刊二十五周年を祝い、二〇〇二年には三十周年と一五〇号達成を喜び、そして今、いよいよ二〇〇号の舞台を踏む事になったと言う。そこに至るまで刻み込まれた年輪に深みは、その輝きは、神の恵みの内に豊かに実った「島のひかり」を讃える素晴らしい花飾りだと思えます。本当におめでとうございます。私も皆様と共に、心から喜びを分かち合いたいと思えます。

思えば私も、一九九六年の一五〇二八号より二〇〇二年の一五〇

号まで「島のひかり」の原稿書きに励んだものでした。編集された第三巻に残された自分の記事を読み返しながら、あの頃の懐かしい思い出が甦ってきます。特に編集者スタッフ達とのご苦労と頑張り、長引く作業を終えた時の安堵と喜び、共に労をねぎらう為に交わした癒しのお酒のおいしさなど…。

ところで奇しくも私が最後に書いた原稿は一五〇号の節目の時でした。あの時のタイトルは「灯は消えることなく」でした。二〇〇号の今回は『島のひかり』今なお輝け!!』です。それは今もその灯を放ち続ける「島のひかり」がなお輝いて、これからも多くの人の道しるべとなりますようにとの願いを込めての事です。どうぞ次は二五〇号を目指して頑張ってください。

「始める事は難しく、続ける事はなお難しく」。でもその難しさを乗り越える力と勇気、熱



意と団結がそこには満ちていると信じています。「島のひかり」よ、今なお輝け!!

## 島のひかり



ミカエル  
山川 忠

2004年  
〜  
2005年

### ■海の向こう側へ

季刊紙の発行に至ったのは、いろいろな事情があったからではないか。アーカイブのような単なる情報の収集を狙ったものでもあるまい。

何よりも、海の向こう側へ、光を届けたい、そんな一途な思いと愛情があったからではないか。そう思ってしまう。海の向う側では、島を出て行った息子や娘たちが里の便りを待っていたからである。

題名をみて、つぶやく人がいるかもしれない。光だったら、都会の片隅にだってある。眼識さえあれば、光はあふれている

ものだ。島に限られるものではない、と。「島のひかり」と題するのであれば、紙面のどこかに光がなくてはならぬ。幾重にも光の精査が必要となつてこよう。発行も毎月ではない。年に四回刷るだけに留まっている。となれば、時たま点灯する蛍の光に似ていないか。毎月出してほしい、と今も願っている。

### ■「島のひかり」より難う

復興に明け暮れた、日本の高度成長期には、沢山の子どもたちが、島をあとにした。教会も都心に向かった子どもたちのことを決して忘れることはなかった。彼らの信仰を支え、鼓舞するために、各小教区が手を尽くしていたからである。

詩編36・10には次の言葉がある。あなたの光の中に、私は光を見る、と。

里から届く季刊紙が里の香りと親の心を運んでくる。親から受けた教えの通り、しっかり生きねばとところに誓っても、自分のどこかに、空洞が生まれ

る。そんな自分をただし、叱れたのも、季刊紙が手元に届いていたからではないか。

記念号にあたり、これまで編集に携わってこられた多くの方々に敬意と感謝を捧げたい。

浦頭小教区の皆さん、どうかご健勝であってください。

## 島のひかりは地域のたから



ミカエル  
眞浦 健吾

2005年  
〜  
2011年

島のひかり、二〇〇号おめでとうございます。島のひかりは浦頭小教区内の出来事だけでなく、奥浦地区に関連する様々な記事を取り入れている新聞です。そのため小教区の新聞を超えたものとなっています。その新聞を楽しむに待っている浦頭を離れた方々には、(私もその一人なのですが)教会やふるさとのできごとを知ることが出来る素晴らしい新聞です。またふるさ

ととの信仰の架け橋でもあると思います。島のひかりが送られてきて、今、教会に行っていない自分、信仰に迷っている方々を、島のひかりの記事を読むことによって勇気付けていると思います。その意味で、島のひかりは、宝物ではないでしょうか。浦頭の六年間、記事を書いたり、発送の手伝いをするのが出来ました。手伝いをしながら編集委員の方々の大変さや難しさを知ることが出来ました。でも強い責任感を持ち、うれしうに奉仕している、されている姿には凄さと感動を感じていました。発送後のごくろうさん会も楽しみでした。これまで、島のひかりに関わってくださいった皆様に感謝したいと思うし、これから浦頭小教区信徒全体で、皆さんの宝である、島のひかりを大切にしてください。



## ひかりは故郷から心へ

お告げのマリア修道会 Sr木 口直恵

暑さ寒さに負けず、仕事の疲れも払いのけて楽しく編集した「島のひかり」が、もう二百号の節目を迎えたと聞き、ほんとうに嬉しく思います。

百号の記念誌を手にしてから何年の月日が流れたのでしょうか。早いものです。さらに二百号までを重ねて来たことは、信徒の皆さんの協力の賜物です。編集委員をはじめ寄付を送り、支えてくださった方々、記事の依頼に応じた方、祈りで活動を支えてくださった方々など、多くの人のおかげ、小教区の一致の印です。故郷を離れ、あちらこちらと移動する中で、島のひかりを通して、子供たちの成長を知ることが出来ます。小規模化した小中学校ですが、奥浦の伝統であるスポーツと文武両道の実践で知力も伸ばしていることを感じ、私も負けないように頑張ろうと意気込みます。特にスポーツが大好きなので小体連、中体連、競技の活躍は嬉しいニュースです。

高校を卒業した若者が種々の部門で活躍している様子もわかり、子供たちや若者の情報も楽しみにしています。

信徒の活躍が手に取るようにわか

り、神父様の霊名祝いの楽しい様子などの写真に目を凝らします。

次々と亡くなっていく恩人たちの訃報には寂しくなりますが、天国に知り合いが増えたと思えば心強くなります。特に専任カテキスタ時代、お世話になった信徒の皆さまのことを思い出し、日々感謝の祈りを捧げています。

いつも心には「故郷の皆さまと神様のことを学びたいなあ」という思いがあります。父と話し合って私の名前を考え、名付の親となってくれた松下山神父様は、「どんな仕事よりも神様のことを語り伝える務めを大切にしないさい。」と教えてくれました。カテキスタができない場所においても師の志を受け継ぎ、熱意だけは失わず、宣教に努めたいと思います。

浦頭小教区を守ってくださる信徒の皆さまの祈りと働きが出身者を支えてくださっていることに感謝し、今後ともキリストを信じ、希望し、愛して完成に向かうことができるようにと日々の祈りを捧げます。

島のひかり二百号発刊を心から喜び、ご活躍を祈念します。

## ひかりを送り続けて

二百号の節目から

木口重憲

島のひかり編集部は、昭和四十七年に当時の主任司祭であった野下千年神父様の指導の下、浦頭教会に関連ある事を、信徒にしっかり知らせる事を目的に発足しました。

私自身も、都会にいて届いた封筒を開いてじっくり読みながら、なつかしさがじゅんじゅんと滲み出た思い出があります。ふる里に帰って来て、子供が三人生まれ、家を建て、少し落ちついた頃の日曜日のミサの時でした。

「島のひかりの編集員に木口重憲さんがなりました。皆さんよろしくお願いします。」時の主任司祭は片岡神父様、そこから編集員としての日々が始まった。片岡神父様には、結婚する前のけいこの時からお世話になっていて、当時の事を思い出す時、つながる様にその姿が思い浮かんで来ます。その時、島のひか

りは今と同じ年四回の発刊になっていたが、文字が小さく、全体で現在の一・五倍の内容が詰め込まれていた。更にさかのぼれば当誌の最初の頃は、年六回の発刊になっており、一号発刊するに当たり、八回程集まって編集作業する事を考え合わせれば、仕事との両立がどれ程困難であったかを想像してしまう。そんな編集委員の四十三年に近い奉仕の上に、この二百号という頂きに立たせてもらう事を思えば、感謝の気持ちと共に、ねぎらいの言葉を当誌を支えて来た編集委員の方々に贈りたいと強く感じます。それと共に、この地から離れた信徒を含め、多くの読者に支えられ、励まされた事に対して「本当にありがとうございました。」という言葉を感じました。これからは、困難な事に出合うかも知れませんが、皆さんの力を借りながら、信仰のひかりの助けとなるよう頑張っていきたいと思います。

## 婦人会から女性会へ

川口 登久代

長崎大司教区連合婦人会は会員の高齢化と若年層会員の未参加が多く今後の活動への支障が予測される状況の中で組織改革が行われることになり、平成26年度より教区評議会の女性部として次の内容で活動すると報告がありました。

一、連合婦人会は評議会女性部と名称変更し、対象者を高齢者から若年層までの女性全体にして、評議会の中で女性を生かした活動を展開していくこと。

二、その活動費用については評議会に支出をお願いする。

下五島連合婦人会も連合評議会女性部として活動することになりましたが各小教区の会員資格、会員の事情など連合女性部として統一するには難しく各小教区で検討することになりました。

浦頭小教区婦人会は総会を開き改革の内容を理解してもらい名称、会員資格の変更を次の内容で決定承諾を頂きました。

名称 浦頭小教区女性会

会員資格 学生を除く18歳以上

65歳未満の女性

(未婚の女性については青年会活動を妨げない)

会費 壮年部、シメオン・アンナ会等も会費制であり現状のまま女性会も会費有で活動する。

役員の方や新会員の皆様がいきなり役員を持つと言うことが無いようにと意見もあり検討されました。

(詳しい内容は改訂規約にて) 現在会費を集金と同時に新会員様の入会が行われ、御理解とご協力をいただいております。カトリック女性会の会員として自分が今できる範囲内の活動協力をお願いします。

## 「感謝」

赤尾 弘樹

二〇一四年五月四日、天気にも恵まれ、沢山の方々の祝福を受けながら結婚式を挙げる事が出来ました。いつも気にかけてくださる方々に結婚の報告ができることをうれしく思います。

結婚が決まって準備を進める中でいつも感じていたのは、家族だけではなく神父様をはじめ、教会や地域の活動で関わってくださった皆さんに支えられていたということでした。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。勉強を受けるごとに、家庭を持つことへの意味の深さや責任感など改めて考えさせられました。愛するといふ言葉の意味を、深く心にきざんだ時間でもあったように思います。

相手を思いやる気持ちや感謝の心を忘れず、一歩ずつ、しっかり歩いていきたいと思えます。

## 「良きサマリア人会 役員決定」

二月に発足していた良きサマリア会の代表者、事務局長が正式に決定しました。

代表者 鍋内 絹恵

事務局長 赤尾 栄

以下、代表者の言葉

「日頃より、この会の活動に御協力いただいている皆様に感謝申し上げます。地域をつむぐ岩崎神父様の御指導の下にお互いがつながりを深め、心を一つに取り組んでいける事を心強く思っています。これからもよろしく申し上げます。」

なお発足後の状況は、月一回第二火曜日、午後五時から送迎ミサは、協力者、送迎者のサポートの下、利用者十七名。子供達の登校時における立哨を浦頭教会下と浜泊公民館前で活動。なお、七月より音訳奉仕者養成講座の開設予定です。



# “聖ルドヴィコ 神学院生来訪”

神言修道会・小神学校・聖ルドヴィコ神学院から、院長浜口末明神父様と指導司祭ブー・カイン・トゥイン神父様が、十三名の神学生を連れて、五月三日・四日、下五島教会巡礼に来られました。浦頭教会神洋館に宿泊、日曜日の二番ミサと一緒に預かり、召命の為に祈りを捧げられました。なお、翌日は上五島教会巡礼に向かわれました。



赤尾栄さん宅で楽しい夕べ

# 岩崎神父様誕生会

七月六日、岩崎神父様の誕生会が例年通り行なわれた。

神父様は今年五十歳を迎えられ、まだまだ元気一杯です。

この日は偶然にも誕生日だったのですが、神様はなぜか、雷と大雨を降らせました。だれが悪いのか…。それはさておき、神父様の誕生会を祝うために信徒をはじめ、野口市長、奥小、奥中の校長先生、役所の方々、スポーツ仲間、金子産業の所長さんと総勢六十三名が集まりました。



進行係に評議会書記の入口信さんが慣れた口調で進める。

議長の本村義則さんは、お祝いの言葉に、神父様のご健康を思っている言葉が述べられた。

女性会を代表して、会長の川口登久代さんより花束贈呈が行なわれ、いよいよ宴会となる。会もたけなわとなった頃、副議長の鍋内誠次さんより来賓の方々の自己紹介が行なわれ、それぞれお祝いの言葉が述べられた。五時に始まった会でしたが、七時位になると、ちらほら千鳥

足で帰る姿も。後で聞いた話によると十時位に終わったとか。

準備などして下さった女性会の皆さん、評議員の皆さん、本

当にお疲れ様でした。

これからも、岩崎神父様の御健康をお祈り致します。



## 感謝

香典返し

カトリック浦頭教会へ

入口 悦子様 堂崎

(亡夫ミカエル仁兵)

右の方よりご芳志を賜りました。お礼とご報告を申し上げます。

# 潜伏キリシタン墓で ある旧木の口墓所

長崎ウエスレヤン大学准教授  
加藤久雄

五島市平蔵町（福江島）所在の旧木の口集落墓地について、二〇〇九年より加藤を中心とした調査チームにより聞き取り・踏査・測量・実測・管理者の清掃にともなう地表散布の陶磁器等の記録を実施しました。

寛政九（一七九六）年、五島藩主盛運は、領内の開墾と殖産を目的として、大村藩主純伊に農業技術者の移住を依頼、大村藩としても人口抑制と潜伏キリシタンの取扱に苦慮していたので、両藩の利害が一致し、一〇八名の大村領からの公的移住者を六方に上陸させ、近接する平蔵などに定住させました。そのころ木の口は、古くからあった平蔵集落に最も近い未開拓地でした。移住者は日々、イモ畑を拓き、神に祈り潜伏キリシタンの信仰を通して見えない教会を守ってきました。移住者は木の口に定着します。そこで生活がおこなわれると人が亡くなります。人が亡くなれば埋葬され、墓地が形成されていきます。

石を並べた、あるいは積み上げた墓石組み墓一六十三基と、表面に十字が浮彫りされた板石墓一基、改葬された明治・大正の年号を刻む墓石二基、その他改葬痕跡等墓の跡と思われるもの十一基の計七十七基を確認しました。これらは斜面を切り開いた三段の平坦地に広がっており、現在よくみられる

ような家族等による明確な区画はありませんでした。

墓の在り方は、中心に小さな立石を持つもの等、細かな差が見られ、このことは時代や葬られた人の性格を示すものと考えられます。また面積の差から、大人・子供の物があり、その大部分は方形に近い平面形を示しています。またかつて、墓地の一番高い位置に石製の中心十字架が建てられていたことが伝わっており、このことから、教会墓地ができる前は、カトリック信徒の人々もこの墓地を使用していたことがわかります。しかし十字浮き彫りの墓と近代の墓石を除き、両者には大きな形態差は認められませんでした。（写真左）

これらの調査の成果から、この墓所には潜伏キリシタン人々が、葬られたことがわかりました。一八七三年の禁教が解かれた以降にも、カクレキリシタンだけでなくカトリックに復活した人々も埋葬されてきたことが明らかにまりました。詳細な調査の結果、近世における五島の潜伏キリシタン墓が確認された大変貴重な事例になっています。



## 『堂崎の松並木』

六月二十八日、奥浦地区環境保全事業の一環として、堂崎教会周辺に松の植樹を行いました。

昔の松並木の風景再現を目標に行われましたが、再現の頼りは写真と記憶。松並木を抜けた小高い砂の丘には、記憶にもはつきり映る一本松の苗木を植えました。

成長するには、ある程度年月はかかると思いますが、年配者には記憶、若者には故郷の風景として残していければと思います。



### 秘

### 跡

《初聖体》（二月九日）

ヨアンナ 小林 美結  
トマ 鍋内 孝司  
ペトロ 鍋内 大蔵

《結婚》

松田 優希  
テレジア 鶴川 夢花

（四月二十六日）

パウロ 赤尾 弘樹  
マリアローザ 柿山 直子

（五月四日）

《帰天》

ミカエル 入口 仁兵 堂崎  
（五月九日）  
カタリナ 浜崎 キク 浜泊

（六月二十四日）

《転出》

ヨゼフ 濱崎和利（浦頭↓福江）  
パウロ 赤尾弘樹（浦頭↓福江）

## ありがとう

長崎市

神学院 真浦 健吾神父 様

長崎市 カトリックセンター

教区本部 野下 千年神父 様

兵庫県 犬山 勇 様

神奈川県 聖心の布教姉妹会

Sr 大川 ヨシノ 様



# おたより

いつも島のひかり御送付いただき、感謝しております。郷里を離れていても、皆様方の暖かい愛情と一生懸命に努力しておられるご様子が伝わって来ます。

天草市 大江修道院

Sr 赤尾スミエ

毎回、島のひかりを送って頂き心から感謝申し上げます。

ふるさとの様子を知らせて頂けますこと、主任神父様をはじめ、信徒の皆様の深い信仰の祈りに支えられ、神様への愛の宣布のため日々捧げることのよるこび、恵みに感謝いたします。

藤沢市 聖心の布教姉妹会

Sr 大川ヨシノ

島のひかりを毎回、遠い兵庫の地まで送って頂きまして有難うございます。宮原を離れて五十年少々過ぎます。拝読しながらなつかしくなります。

加東市 犬山 勇

# お詫び

人物往来 転入

◎宮原真都華 ①藤原真都華

四月号の名簿もれ

地区員会計 浦 勝己

典礼委員 本村義則

福祉委員会 副兼会計 赤尾栄

下五島代表 鍋内絹恵

◎小教区四十五周年実行委員会発足。六月六日第一回会議。六月十七日、役員会に於いて決定される。

記念ミサ：九月二十一日・十時  
(ミサは記念ミサのみ行なう)  
ミサの流れ：小教区四十五年のあゆみ朗読(作成：木口利光氏・朗読：典礼委員会)

祝賀式：眞浦神父様銀祝(お祝金、花束、霊的花束、お祝いの言葉)

島のひかり二〇〇号達成感謝授与式。

祝賀会十二時より(小教区四十五周年・眞浦神父様銀祝)

# ついに完成!

鍋内 誠次

四月十四日、小雨が降るあいにくの天気でしたが、多数の信徒の前で待ちに待った「新トイレ」の祝別式が行なわれました。浄化槽で蚊の心配もなく、車イスの方や乳児を持つ方々のために作られた多目的なスペースもあり、明るく使い易いトイレが完成しました。建築するにあたり、御協力いただいた信徒の皆様をはじめ、業者・関係者の方々に感謝、感謝。このトイレ嫌な事も流せるトイレだと、いいのになー。



# 植松教会巡礼

去る五月十三日、大村の植松教会の信徒三十三名の方々が、五島巡礼のため浦頭教会を訪れました。

アンナ会でお茶の準備をしてほしいとの事だったので、赤尾敬子さん、鍋内美智子さん、鍋内絹恵さんと私とで、なんとか浦頭教会のおもてなしをしたと思います、定番のふくれもち、つき揚げ、それにイチゴ大福、夏ミカンゼリーを用意させていただきました。

皆さんは「美味しい、美味しい」と言って喜んで食べて下さいました。又、残ったものも全てお持ち帰り頂きました。

お茶の後、堂崎教会へ向かわれ、帰りには五時のミサと一緒に与えられ、いつもはちょっと淋しい夕方ミサも、とても素晴らしいものでした。

植松教会の皆様、お土産有難うございました。

又、協力下さった三名の会員さんにも感謝です。赤尾スエミ

## ふる里だより

第3回

## 蛍鑑賞会の夕べ



梅雨を間近に控え、緑鮮やかさを増す中、浦頭の大蔵川で初夏の風物詩になりつつある蛍鑑賞会が行なわれました。

今年は、子供達にふる里の美しい夜の風景と自然と、溢れんばかりの活気が上手に調和していた昭和三十年代、四十年代初頭の初夏の様子を再現し、体験してもらおう事を念頭に企画。

集まった子供達は、奥小・奥中のほとんど。それに保護者、地元の人達。百名を優に超える人達が集まりました。子供達は、めんこやこま回し、お手玉等に夢中になって遊びます。遊び終え、腹が減ったところでもうそう竹に流れる素麺に舌つづみ。夜は、かすかに、けれど鮮やかに点滅する光達の舞いを無心で追います。川面に「わー、きれい。」という声が響きながら小さなこだまになりました。

## 中総体バレーボール大会

5月25日(日)

男女ともに粘り合いの接戦を繰り広げ、会場が大きく沸き立ちました。

どの学校も本大会に照準を合わせてチームを作ってきているので、そう簡単には勝つことが出来ない中、男子は見事に勝利することが出来ました。

最後まで諦めない気持ち相手より勝っていたからでしょう。

次は、県大会です。新たな目標に向かって、更に厳しい練習に精進することを期待しています。

女子は、試合終了の笛が鳴るその瞬間まで、全員が大きな声を出し、粘りに粘りましたが、最後は相手に振り切られてしまい、悔しい結果となりました。しかし、チームとしてのまとまり(仲間との信頼関係)と、今まで(三年生にとって三年間)やってきたことを全て出し切ろうとする姿勢が強く感じられました。そんな試合を見せてくれた女子チームに、心から感謝の拍手を贈ります。

## ペタンク大会に参加して

赤尾 栄

平成二十六年五月十日、第一回長崎県ねりんピック、ペタンク大会に出場しました。

選手、鍋内美智子さん、赤尾喜代美さん、そして私、監督、中里徳美さんで参加しました。五島市の大会で上位三チームの中に入り県大会へ。県大会は諫早なごみの里運動公園で、百二チームで予選リーグがあり、三勝して決勝トーナメントに残りました。三人のチームプレーと息が良くあった結果と思います。二十六チームで決勝トーナメント第一試合十一対十で勝利。第二試合、長与チームと対戦。十対八で勝っていましたが、あと一点が取れず逆転負けで終わりました。相手チーム応援団のマナーの悪さにいらついていたのか、平常心を保つ事が出来なかったのが敗因だと思います。色々なことがあり、勉強になった大会でした。翌日、三人で中町教会のごミサにあずかり、感謝の祈りを捧げました。

## 編集後記

一九七二年(昭和四十七年)

小教区の機関紙として発刊された『島のひかり』は、今号で二〇〇号を迎えることができました。信徒・地域の方々のご協力の賜物と深く感謝致します。

私が島のひかり編集部員として活動するようになって、何年経つのだろうかと思い、過去の島のひかりを調べてみた。平成十七年七月発行の編集後記で、私の紹介がされていた。数字に弱い私は指を折って数えてみた。

九年になるようである。九年しか経っていないのに、最近気力がなくなってきたている自分に反省させられた。今回の二〇〇号を機に、気を引き締めて取り組もうと思う。

「小さいながらも世の光でありたい」との思いで作られた『島のひかり』が、これからも信徒の足を照らす小さな光であれたいと願っている。

竹山 巧